

公を輕すといへる、孟子の大人に説くに、その巍々然たるを見るとかかれといひ、又諸侯を藐すといへるは、すべて貴人に説くには、その貴人を先づ呑で、後にあらざれば、迎もその辯舌を働すと能はざるは、ことごとくあらば、此等の詞は、只説客の腹氣を吐露したる者なれども、是に就て見ても、上を輕じて、下に隱れ、天人萬物の道理を研究したる者もありとてはる。莊子なども、荒唐の文あれども、是は時勢を矯めんがために、激言したる者にて、開卷の篇中に、空氣の厚薄、物質の膨脹する理を説ける所など、千載の上に出で、かくはかり窮理したる者など怪まる。且諸子百家を、余は好みて讀むに、すべて世間の噂をよくしれること、是亦驚くべし、上は公卿大夫の内輪の事から、下は裏店社會、僻陬混濛の事迄も、ありとあらゆる事、一々書に書きのせてあるは、感心あり。ともかくも、此時分は、やはり今日の雜誌に、新聞に、珍事をかきのせて、世間に弘むるやうに、何事にても、口に述べ、書に著はし、天下に傳へしものと察せらる。畢竟、これを總ぶるに、此時分の言論の區域の廣さによる、と言て可あり。只言論の區域廣さ故に、學者論客、各所見を述ぶるとを得たるあり。(未完)

### 五家庄途の記 (承前)

不老庵主人

四月三日快晴 爐火もいつまか消えて、明け方の寒さは、毛布を通して肌に徹するに、一同夢破れて起きつ、再び薪を焚きて暖を取るに、先きの男も疾く起き出で、何くれとかく周旋す。それだよあるに、五家第一の險路といふ今日の路をば、此男自ら案内し呉れんといふ。いとうれし。昨夜炊きま麥飯にて朝餉したため、搏飯をも製しつ、七時はかりにや此家を辭す。又と來べき處を知らねば、幾度か振か

へり見つゝを行く。

縦木より少ま行けば、球摩川の上流ある縦木川に出づ。幅いと狭くて、流いと早し。こゝにて音に聞きし吊橋を渡る。其様いと珍らかなり。先づ大木の兩岸よりさま向ひて生じたる處を求めて、其枝より蔓のいと大あるを幾條となく垂下ぎ、其端にて、此岸より彼岸へ並べ渡せる竹を結び合せたるあり。世にいふ如く、危きものに非ざりまは遺憾ありしも、何様橋梁架設の道開けざる上代の様もかくや、と思へば有り難きに、

千早振神代のさまもしられけりつるもてうけし五家のつり橋

これは主人が悪歌あり。やゝ行けば上り坂いと急なり。登り詰めに一軒の茅屋あり。これを見しときぞ、昨日縦木を見し、我等の目にも驚かれたる。一間半に二間許の掘立小屋の、屋根も、四壁も、薄の枯葉にて圍ひたるに、只一方に半間許の口を開きたれば、内はさながら洞穴の如く、床は固より高く、唯土上に丸竹の簀ノ子のいと粗さを置き、其中央を掘りて爐どしたり。我等を見て夫婦のもの内より出づ。水はさきやといふに、婦、汲きて參らせんとて、石油罐の蓋去りたるを提て去りぬ。暫しゝて汲み來つ、何處よりか汲みしといへば、下の河よりといふ。さては今我等が身一つだに、喘ぎくづ登りし坂を、此婦は水提げて登りしとよ、と驚きぬ。こゝより下り坂となりて、先きの河の水際まで下る。川に沼みて少し行けば又登る。これより川の左岸に傳ふて下るに、兩岸の峻峰は崎嶇嶮あるに、羊腸の路、そが斷崖に通せり。或處は石質疎鬆にして、自ら霏爛したるを踏ま行けば、一歩々々に鑿々と玄て碎くるあり。若し急に歩を移さずして、碎けて行くに任せば、千仞の底に轉び落ちて、原町の旅宿の亭主が所謂、『六ヶシ』の運命に陥る外あらじ。亭主が言こゝに至つて愈真あり。

く字を横にしたる如き峠を、幾つか越へて行くに、處々枯木の元々たるは、玉蜀黍を植えん爲め燒き枯せしありと嚮導云ふ。さて愈行くに疲勞甚し。暫らく憩はんといへば、嚮導曰く、此先きに横平よこたいらといふ處あり。そこまで行かんに、奮發し給へ。横平か、妙々、必定平夷の處と覺えたり、と樂しくて、巖に攀ち石を踏で進むと數丁、吐く息は餓の如く、流るゝ汗は湯を注ぐが如き。かくて急坂を登り詰むれば、嚮導曰く、いざ憩はん横平よ、といふに、見廻せば屏風を建てたらん如き山腹、横平とは何の謂ぞや、と一同目と目を見合せては、ゝゝゝ、例の一人が、早くもつゞけたる、三ろ文字あまり一文字ぞをりまき。

横平平かあらで横しまよこゝらの人をだましぬるか

憩ふと十數分にして出で立つ。路の險惡は前に異らず。さて此道すがら、前見し如き茅屋の、彼峠に一つ、此谷に一つと孤立するあり。其構造は大同小異にして、稍よきは土上に板を並べて床としたるもあり。爐上には概一個の鍋を吊し、其傍に繻縷に捲かれて、横臥して我等の通るをば、眼を光らえて見る様、我等と同人種とはいひたくなし。さて御所持の財産何々ぞと窺ふに、第一、獵銃これは如何に陋しき内にも、一挺備へぬはなし。これ生活の第一要具あれば。次は獵犬、これも一疋づゝ居らぬは少し。次は玉蜀黍、之を搗く曰、これ等はなき處もあり。次に最も奇あるは、野猪の下顎を數十百、棒貫きて横に屋根と壁(固より薄壁あり)との界よ掲げたる、何處も皆然り。これは多きを誇るとかや、されば古きは幾十年や經けん、眞黒に煤づきたるより、新しきは此冬取れたりと見えて、生々しきまであり。一奇習ならずや。これ等より外にさしたる家財も見えず。其生活の簡單なる驚くべし。

縦木より三里は慥に來けんと思ふ處にて、少し平地に出づ。こゝにも例の茅屋あり。犬頻りに吠ゆ。小

憩の後こゝより下るよ、やがて極急の下り坂に出づ。絶りて下るべき矮樹葛蘿もなければ、危さ筆も詞も及び難きに、名よし負ふ、飛雲、雲の飛ぶ如く安々と下駄にて馳せ下る。下り詰めは例の川畔にて、深潭は凝錠の如く、奔湍の飛沫は雪の如くあるに、水は晶の如く明かに、淺瀬を下る處は底の眞砂も數へつべし。兩岸の岩は始原期のものとかや、火山岩の殺風景なるに似ず、大者には大態あり、小者には小致あり。清絶、幽絶をどゞはかゝる境を見ぬ人の、濫に口にすべくもあらず。あゝれ、自然は此清美を人跡僅かに至る深山幽谷に封じて、柔弱士女の遊觀に資するを惜むか。流笛の響く處、腕車の走る處、何こにか此る境を求むべき。さてこゝを對岸に渡るに、淵に臨める兩岸の岩は、鍔々として斧もて削りしが如くあるに、藤葛のいと大ざるを横に張り。双手もて之を捉へつ、巖角の僅かに足踵を托すべく突出したるをば、傳ふて蟹行するに、脚下は深淵蓋の如く、蛟龍の窟もこゝよやと覺えたり。競々戰々、之を過ぐれば獨木橋あり。こゝにて對岸に渡る。時よ十一時。やゝ久しく憩ふ。傳へ聞く、其かゝ平家の五家に潜みたるとき、潜隱の事の露れんを恐れて、一步も庄外に出でざりしかば、世の中には、この山奥は人跡の及ばぬ處とのみ思ひしに、いつの頃にや、川上より一つの椀の流れ來しを見て、始めて住人あることを知り、其川を涸りて、尋ね出え、とぞ。此事眞ならば、此川のことからんかし。

さてこゝを發して行くに、こなたの岸も奇若いと危し。數丁行けば斷崖の屏風の如くあるが、眼前に峙つ。塀を攀づるが如く、身を垂直にして登るに、繩を草の根屢抜けて落ちんとする、いと心細きに、捕ふる人のなければにや、頭上にさしこまれる梢よは、恐づる様もまぐ、驚ぞ囁る。美音はいつも美音をあれども、人の辛苦を知らず顔なる、見苦しき彼奴が鳴き様かな、と腹立てしころ、後にて思へば

いと可笑まけき。

こゝを過ぐれば、やゝ平にて茶樹疎らに栽えたる處を通れば、やがて大なる家あり。五間に三間もありぬべし。用材甚だいづめし。入りて憩ふに、亭主は横臥したるが起きもせず。婦は鉄鑊に湯沸かしつ、茶入れて薦ひ。おゝにて晝餉したゝむ。暫し憩ひて立ちしは、午後一時ばかりや。これよりは路頗るよし。椎原までは二里を出でじといふに、元氣舊に復しつ、愈行きて三時半許に、谿を隔てゝ椎原を見る。此先きは迷ふべくもあらねば、嚮導をば禮懇ろに述べ、謝料とらせて還す。さてこれより下り坂のいと曲折したるを馳せ下れば、又吊橋あり。先きのと構造は全じ。唯頗る長くして底深し。近き頃修繕したりと見えて、處々青竹あり。半まで渡れば、たのづから動搖するに、橋桁の隙間より洞底を瞰れば、水渦き流るゝ様、氣味悪しうらざるにもあらず。渡り過ぎて後、手帳取り出でゝ略圖を描く。此橋椎原の入口にして、少し行けば人家三四あり。これ等は何れも縦木に比すれば、堅牢清潔にして、普通農家に大差あり。よして今日の道すがら見し茅屋を此の比に非ず。さて區長緒方氏(これ舊五家地頭にして平家の正胤あり)の邸に入りて、一同憩ふに茶を出さる。今宵一夜の宿を借し給はらずやと申すに、常はいと易き程の事あれども、日比木挽を備ひ入れたれば、いと事繁きに、其事叶はじとあり。さては力なし。此邊の民家に宿るより外、せん術をしといふも、民家とてもよも留めじといはるゝに、さてはいよく力なし。いづかはせんぞ暫し案じ煩ひしが、一人曰く、日はやゝ傾きぬれど、今より久連子まで急がん、路程二里には過ぎずといふぞ、といふ。一同然るべしと同したれど、我のみは例の徴兵検査の期日ありて、久連子より五木、四浦、人吉へ廻りて、期に後るゝとあらば、由々しき大事なり。いと本意なけれども、分離と決しぬ。一樹の蔭、一河の流を共にする旅人も、別に臨では多少の

情ありとかや。況んや我一行人は、此三日共に峻嶺の雲を踏み、共に幽谿の水を涉り、興至れば共に顔を破つて笑ひ、危に臨んでは手を援て行きし者、今や我獨り此異郷に別る。相見る旬日の間にありとも、亦多少の感あからんや。かくて四時半許に悄然として相別れ、九人は久連子へと急ぎぬ。

既に單身となりたるに、緒方氏曰く、御身獨らば苦しからず、留まられよ、とあるに、いと嬉しく、洗足して坐に上りつ、主人一學氏に挨拶す。一學氏年齒五十許、長顔細目、風采自ら秀で、一見して其尋常の出ならざるを察すべし。今しも短褐を着け、股引を穿ち、傭工を董する傍ら、煙草一服の休息をされしあり、寒暄の辞早や濟みて、談將さに他に轉せんとするどき、家人茶菓を持來る。一學氏曰く、かくの如きものはとても、都會には求むべからず。五家の土産に試よ、といはる。何なりやと問ふに、これは栗實を殻のまゝ、竈上に吊し置き、二三年を経て後取り出で、之を舂き、棘を去り、殻を脱き、小豆を混へ、砂糖を加へて煮たるありとぞ。げに山間の珍味、空腹特に味の佳きを覺えき。

やがて主人は予を残して去り、再び業を執られしが、久しからずして再び歸り來らる。予は再び氏に就て此地百般の變遷を尋ぬるに、氏は諄々として之に答ふ。先づ教育の有様を問ふに、氏曰く、明治維新の前に在りては、庄民の無智は甚しく、各自一定の姓名すら有せず。固より文字を解するものなく、其日用の言語の如きも、全く庄外の民と別にして、例へば父を○○といひ、母を○○といひき(○○の處忘れたり、遺憾) 其後明治七年四月、故安岡熊本縣令此地を巡廻し、大に教育の必要を説き、又予に對して、若し此地に學校を官設せば、人民は其子弟を入學せしむる望ありや、と問はれまかば、予は其望あり、と答へしにぞ、其後二十日を出でざるに、官費にて教員を送られたり。これを蠻煙深く鎖またる此郷に、教育の微光を見たる始ありける。然れども人煙疎にして入學の子弟甚だ少く、且つ赤貧を

る上に、其後官費の途も絶ゆるに至り、維持の道甚だ難く、明治十二年五月、遂に開校の不幸を見るに至れり。それより九年間は、再び無教育の地となり居しが、二十二年に至りて、再び開校の運となり、現今は樅木、葉木、椎原、久連古、五木各一校を有し、各校月給三圓を出て、教師一人宛を聘し、各三十内外の兒童を教育せりとぞ。嗚呼普天率土王土に非るなく、萬峯重疊して、徑路僅かに通じ、白雲深く鎖して、人跡罕に及ぶ處、琅々たる啾啻の聲を聞き、教化の績、日に熙々るを見る。吾此地よ遊んで天恩罔極の感愈切あり。

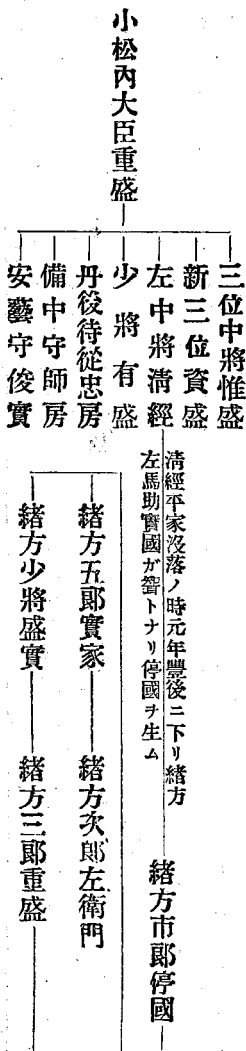
さて此地の政治はと問ふに、曰く、自治制施行の後は、所謂組合村にて、久連子に一名、椎原に一名、仁田尾に二名、葉木樅木柿迫に六名、栗木に五名の區長ありて、柿迫の役場に參會し、庄内の庶政を自治するあり。廿六年七月下岳も合併の願をなし、本年一月其許可を得たり。維新前に在ては、所謂天領にて幕府の直轄に屬し、二十戸を一村とし、合村を許されず。其支配は西國御郡代天草郡富岡の陣屋に詰めて之を支配せり。此代官は年々交替するとあり、又三年も引續くとあり。而して年々一回巡廻して、御法度の「さりすたん」宗門、「いあばん」、「ばてれん」の宗門改めあり。繪踏をなさしめ、全時に戸籍調をもあしたり。租税は元禄三年に服部六左衛門御郡御奉行となり、其時始めて獵銃税、家宅税を徵集し始めし外、維新まで無税なりき。維新後に及びて、定められず地價は極めて廉にきて、數十町は亘れる良山を有するも、納むる所の地租僅に數圓あるものありとぞ。

さて緒方家祖先潜隱當時の事を語る。曰く、元暦元年平家段の浦に一敗して、豊後路に落ち、五家庄白鳥山に留りたるに、賊黨其貴族たるを知りて、之を護したり、後出でて、豊後の緒方左馬介實國の聲どかりしが、明年又源氏追討の恐あり、再び白鳥山に隠れ其後復出です。當時の年號(文治か)を百八

十年間襲用せり。此緒方左馬介は豊後祖母岳大明神の裔にきて平家に黨せり。其姓を用ひて今日まで緒方を稱せるなり。さて後分れて三家となり、緒方記四郎は椎原に家す。これ宗家あり。(即ち一學氏の先)第三郎久連古に家し、季兵部實明葉木に家せしが、後こゝを去て四國に落ち、阿波國源内といふ所に行きさり。其人當時の旗を分配して持ち越したり。葉木は其後源氏の追蹤を恐れて、菅丞相の子、菅秀才の後と稱せり。(本紙第十四號に出でし「五家庄由來記」最も没落當時の事情を悉す。但し此記に據れば、上記初度潜隱の事なし。此記は萬永元年、熊本の御郡御吟味役、青木源次郎此地の由來を求めよとき、古文書を集めて編述せられよとぞ。又れ嘗て一古記を得たり。末尾の附記稍由來記と訥鑿すれども、參考の爲め左に出す。

妙解公(細川忠利公)寛永十一年國中巡見の時初めて此山中にて人栖することを知り玉へり此郷には殿様まで一種の貴族あり。姓を緒方氏といひ他郷に交通することなく勿論熊本に來ることなく正月の御禮たりとも御花畑に其貴族主人は來るなし禮服は麻の半切の如き者を用ゆ此郷土緒方藏座の二氏を以て其長とす其先は平氏にして壽永元曆の役に平氏敗走して海底に没し其餘族此山林に隱退すと云ふ或る禪刹にして五ヶの庄の人なる者云へることに五ヶ庄の先は小松内大臣重盛の三男左中將清經西海を遁れ豊後緒方左馬介實國が裔なる其産む男を緒方市郎停國と云ふ其所傳の系圖に由て見れば左の如し

此間平貞盛より平重盛まで系圖あり今畧す





緒方記四郎盛幸

此三人建長三年三月十三日豊後を逃て

緒方三郎近盛

五家山白鳥嶽に潜隠す深草院の御宇な

緒方兵部實明

り元祿元年まで四百四十七年なり

小松殿の三男左中將清経は豊前柳浦にて、月明かに空澄たる夜、閑よ念佛を唱しつゝ、波は底に入りしと、物の本に見ゆれど、正しくは露の命の惜くて、主従六人、緒方實國を憑きて、其館に三年が程身を隠せしが、實國が最後に、娘時姫の十五歳あるを、十七歳の清経よ妻はせ、其後薩摩へ志して、主従唯七人落ち行きけるが、途にて山賊に逢ひ、今は危ふく見えしよ、賊等貴族の末路あることを知りて之を奉じ、「九州九ヶ國山々里々又は海邊まで歩行仕候へども爰の様ある處は無御座候と見受候」とて、已が巢窟なる白鳥山に導きたる、これ平家五家潜隠の始めにして、それより今日迄四十七代、絶へて他と交通せず、緒方藏左の二家は、儼然たる「殿様」とあり、土地與奪の權、一に其手に在りて、維新の時に及びまなり。明治六年始めて他と交通を始め、分家或は轉住せり。其以前は、一家五十人位の眷属あるは珍まからず。多きは九十人を有するもありしといふ。此等は平時は、作場々々に小舎を結びて分居し（我等を驚きたる茅舎は、其儘の遺物ありといふ）、年頭盆會等、時を定めて相會する例ありしうば、其家屋は構造甚だ大にして、緒方氏の居宅の如きも、十七間半に五間半の大夏ありしといふ、（其家は先年祝融の災に罹りて、今の家を建てしとぞ）。

（未完）